

に見ている。10世紀のブワイフ朝期が一般にルネサンスとされてきたが、グタスはそれよりも2世紀近く早い時期をルネサンスと呼んでいるのである。

以上の概略以外にもこの書には貴重な示唆が数多く含まれているが、紙幅の都合で割愛せざるをえなかった。この書はデータを積み重ねて結論に至るという手続きを経た研究ではなく、問題提起を重視した著作である。この点にはグタスも意識的であり、巻末に翻訳活動に関わる各学問分野の基本文献表が付されており、よりマイクロな視点からの検証に我々を誘う。グタスの指示に従った研究と共に、イスラームとは一体何であったかの再検討も我々の課題となろう。

---

W.Vanhamel (ed.) :

*HENRY OF GHENT*

*Proceedings of The International Colloquium*

*on The Occasion of The 700th Anniversary of His Death (1293),*

Leuven University Press, 1996, pp.IX+457

加藤雅人

本書は、ガンのヘンリクス の 没後 700 年 を 記念 して、カトリック・レーヴェン大学の哲学研究所内ド・ウルフ=マンションセンターにおいて開催された国際コロキウムの報告を元にした論文集である。編者によれば、このコロキウムには二つの目的があった。すなわち、「第一に、ヘンリクスの教説および彼の著作の批判校訂版に関するさまざまな研究領域の問題の現状 (status quaestionis) を確認し、第二に、専門家たちが特定の問題についての様々な意見や考察を交換するための場を提供することである。この論文集の出版によって、われわれの現在の知識が評価され、さらなる研究への可能性が開示される」(p. IX)。したがって、この趣旨にそくして、以下に若干の書評を試みることにする。すなわち、文献学的・伝記的研究、認識論に関する研究、形而上学に関する研究に分けて、いくつかの論文を取りあげてヘンリクス研究の現状を紹介しつつ、「さらなる研究への可能性」の一つとして「関係」(respectus) という視点から、残された課題について言及したい。

まず第一に、文献学的・伝記的研究を取りあげる。P. Porro, “Bibliography”, pp. 405-434 において、ポッロはヘンリクス関連文献のほぼ完全な文献表を作成した。彼は文献を、著作、翻訳、研究に区分した上で、著作をさらに旧版、批判校訂版、その他の版という三つに分け、研究をさらに「ロマンチックな再発見」1837-1890、厳密に教説的な性格を帯びた初期の諸研究 1895-1951、『定期討論のスンマ』と『任意討論集』の復刻版以後の新たな関心 1953-1978、『ヘンリクス全集』の最初の巻の出版以後現在まで 1979-、という四つの段階に区分して年代順に整理した。

ポッロはまた、P. Porro, “An Historiographical Image of Henry of Ghent”, pp. 373-403 において、これまで曖昧なところが多かったヘンリクスの伝記について、ヘンリクスの伝記、托鉢修道士と世俗の牧師との論争におけるヘンリクスの役割、教説上の論争や彼の説のその後の運命などの観点から最新の研究状況を紹介し、また資料編集の方向付けについても考察している。これらはいずれも、従来の先行研究をはるかに凌ぐ詳しさと包括性とを兼ね備えており、今後の最重要な参照文献となるだろう。

第二に、認識論に関する研究を取りあげる。St. Marrone, “Henry of Ghent in Mid-Career as Interpreter of Aristotle and Thomas Aquinas”, pp.193-209 において、マッローネは、ヘンリクスの真理論について彼独自の解釈を提示している。マッローネはヘンリクスの「認識論的進化」を三段階に区分する。すなわち、特別な照明 (*illustratio specialis*) に重点が置かれていた第一段階、刻印形象 (*species impressa*) の破棄とアリストテレスの学知の概念 (『分析論後書』) へと関心が向けられた第二段階、新しい本質説によって従来の伝統的アウグスティヌス説と新しいアリストテレス説との対決を乗り越えようとした第三段階、である。このうち、ヘンリクスの第二段階における方向転換に焦点をあて、その転換の証拠を『任意討論 IV』(1279年の降臨節あるいは1280年の四旬節)、『任意討論 V』(1280年の降臨説あるいは1281年の四旬節)、および『定期討論のスンマ』31-34項(1279-1281)のテキストのなかに確認している。マッローネの解釈によると、ヘンリクスの第三段階における認識論の新展開は、彼の本質の形而上学の深化と深く関わっている。たしかに、ヘンリクスの本質説は彼の真理論に深く関係している。しかし、彼の「関係」の形而上学についての言及が全くないのは残念である。言うまでもなく、真理とは「合致」や「正しさ」といった関係であり、関係についての形而上学的考察は、真理論において不可欠だからである。

第三に、形而上学に関する研究を取りあげる。J. Aertsen, “Transcendental Thought in Henry of Ghent”, pp.1-18 において、イェルツェンは、ヘンリクス著作の中に二つの相反する方向性（存在から認識へ、認識から存在へ）があるとするパウルの説は、res と ens についての誤った解釈に基づいていると批判した。イェルツェンによれば、ヘンリクスの形而上学においては、res が第一の「超・超越的」概念であり、ens は res の第二次的様態にすぎないのだが、これをパウルスは、res と ens の第一義性の混同と誤解した。またイェルツェンによれば、ヘンリクスの超越概念の考え方が最も明瞭に説明されているのは、「関係の本性」に関する諸問題（『任意討論 VII』 qq.1-2）においてである。

イェルツェン同様、デコルトもパウルス批判した。J. Decorte, “Henry of Ghent on Analogy. Critical Reflections on Jean Paulus’ Interpretation”, pp.71-105 において、デコルトはヘンリクスのアナログア論についてのパウルの説を批判し、存在のアナログアは無限定な存在という論理的な類の二重の否定に基づいていると解釈した (pp.100-103)。アナログア理論も関係の形而上学を志向している (p.105)。

さらに、G. Wilson, “Suppositum in the Philosophy of Henry of Ghent”, pp.343-372 において、ウィルソンは、『任意討論 V』 q.8 および『任意討論 XI』 q.1 を典拠として、形相に付加された関係は、あらゆる内的多様性と外的同一性を除去する二重の否定によって、個物を構成する要素となることを明らかにした (pp.360-361)。私見によれば、ヘンリクスの形而上学を中心にある本質存在と現実存在の区別も関係という概念が鍵になっている。つまり、本質存在とは神の知性（イデア）との関係による実在性であり、現実存在とは神の意志との関係による現実性である。ところが、ヘンリクスにおける「関係」(respectus) の意味の考察はこれまでのところまとまった形ではなされていない。この分野における今後の方向性を明示しているように思われる。

また、M. A. S. de Carvalho, “The Problem of the Possible Eternity of the World according to Henry of Ghent and his Historians”, pp.43-70 において、ド・カルヴァルホは、世界の可能的永遠性について様々な解釈を概観し、最終的に『任意討論 VIII』 q.9 に基づいて彼の結論を提示しているが、創造 (creatio) と保持 (conservatio) は実在的に異なる二つの働きであるという、『任意討論 I』 qq.7-8 における初期の見解を、後期の『任意討論 IX』 q.1 においては、創造や保持といった概念を働きの観点からではなく、関係の観点から考察するようになったため変えたことを、へ

ソリクス自身が認めている点を考察の対象にしていないのは不十分であると思われる。  
最後に、収録された論文のタイトルと著者名（括弧内）の一覧を掲載順に挙げておく。

- Transcendental Thought in Henry of Ghent (Jan A. Aertzen)  
 Henry's Theory of Knowledge: Henry of Ghent on Avicenna and Augustine  
 (Jerome V. Brown)  
 The Problem of the Possible Eternity of the World according to Henry of Ghent and  
 his Historians (Mario A.S. de Carvalho)  
 Henry of Ghent on Analogy. Critical Reflections on Jean Paulus' Interpretation  
 (Jos Decorte)  
 Aristotelian Sources in Henry of Ghent (Jos Decorte)  
 The Sources and the Significance of Henry of Ghent's Disputed Question, 'Is  
 Friendship a Virtue?' (James McEvoy)  
 "Copia" und Schultradition der Summa des Heinrich von Gent (Ludwig Hodl)  
 Some Elements of Avicennian Influence on Henry of Ghent's Psychology (Jules  
 Janssens)  
 God as *Primum Cognitum*. Some Remarks on the Theory of Initial Knowledge of  
 Esse and God according to Thomas Aquinas and Henry of Ghent (Matthias  
 Laarmann)  
 Henry of Ghent in Mid-Career as Interpreter of Aristotle and Thomas Aquinas  
 (Steven P. Marrone)  
 Possibilita Ed *Esse essentiae* in Enrico di Gand (Pasquale Porro)  
 Henry of Ghent's Rejection of the Principle: "*Omne quod movetur ab alio movetur*"  
 (Roland J. Teske)  
 Henri de Gand, Source de la Dispute sur la Vision Reflexive (Christian Trottmann)  
 Supposita in the Philosophy of Henry of Ghent (Gordon A. Wilson)  
 An Historiographical Image of Henry of Ghent (Pasquale Porro)  
 Bibliography (Pasquale Porro)
-